

令和元年6月14日現在

機関番号：24302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16844

研究課題名(和文) 副詞における意味変化の方向性の研究 漢語副詞を中心に

研究課題名(英文) A study of the directionality of semantic change in adverbs : focusing on Chinese adverbs

研究代表者

鳴海 伸一 (Narumi, Shinichi)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：90611799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)： 程度の意味・評価の意味を発生させた漢語副詞の事例として、「けっこう(結構)」の語史をまとめ、口頭発表をおこない、論文を発表した。「代用字表記語」に関する共同研究をもとにしたブース発表をおこない、それをもとに、他の事例を研究した論文を発表した。語史研究をふまえた古文解釈の事例として「方丈記」冒頭文をとりあげ、論文を発表した。日本語史叙述についての方法論的な議論の一環として、理論的総合を視野に入れた個別の語史研究のありかたを検討した論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

個別の語史を総合することによって、副詞の意味変化のありかたを類型化してしめすことを目指した点に学術的意義がある。この視点は、漢語副詞の発達を、漢語の日本的変容の現象のなかでとらえなおすとともに、日本語における副詞の変化・発達の歴史において、漢語受容のはたした役割を考察することを、将来的な視野に入れるものである。さらに、本研究においておこなった語史研究は、そのような理論的総合を視野に入れた個別の語史研究のありかたを、方法論的に検討する作業の一環としての意味をもつ。

研究成果の概要(英文)： As an example of a Chinese adverb that generates degree and evaluative meaning, I summarized the word history of "Kekko", gave an oral presentation, and presented a paper. We made a booth presentation based on joint research on "word written in substitute letters", and based on it, presented a paper that studied other cases. As an example of ancient sentence interpretation based on the study of word history, I took up the opening part of "Hojo-ki" and presented a paper. As part of a methodological argument about Japanese history writings, I presented a paper that examined the way of individual word history research for theoretical synthesis.

研究分野：日本語学

キーワード：語史 類型化 漢語の日本的変容 時間的意味 程度の意味 評価の意味

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語における漢語の研究は、山田孝雄によって、漢語の源流や形態・音韻上の特色、国語への受容のしかたや国語に与えた影響などが概括的に整理されたことにはじまり、その後、個別の語の変遷や、個別の資料における漢語の実態が記述されるようになった。さらに、個別の問題だけでなく、漢語全体にかかわるような理論化・体系化を視野に入れた研究もおこなわれるようになってきている。

ただし、これまでの研究は、体系性の明瞭な分野に関心が集中している。あつかう事象の体系性が比較的とらえやすいものだけでなく、個別の語史研究を総合し、抽象化することによって、語の意味変化の方向性という観点から類型化するという研究方法も必要であろう。

一方で、漢語由来のものにかぎらず、副詞の通時的变化や、類型化・体系化を問題とする研究が、申請者以外によっても近年すすめられており、学会誌『日本語の研究』の展望号などでもそういった動向が指摘されている。

さらに、そうした研究の方向性の動向ともかかわって、ひろく日本語史の叙述方法を論じるうごきも見られるようになってきている。日本語学会 2013 年度秋季大会におけるシンポジウム「日本語史はいかに叙述されるべきか」がおこなわれるなど、研究方法にかかわる議論がさかんになりつつあるといえる。

### 2. 研究の目的

語の意味・用法が変化する事例のうち、副詞用法を発生させたものを対象に、個別の語史を考察し、それを総合することによって、副詞の意味変化のありかたを類型化してしめす。また、それをもとに、漢語の日本の変容の現象のなかで、漢語副詞の発達をとらえなおし、日本語における副詞の変化・発達の歴史の中における、漢語受容のはたした役割を考察する。さらには、そのような理論的総合を視野に入れた個別の語史研究のありかたを、方法論的に検討する。

こうした目的を達成するための一環として、本研究では、時間的意味・程度的意味・評価的意味を発生させた漢語副詞の語史をまとめ、意味・用法変化の類型化を試みる。

### 3. 研究の方法

まず、個別の語史をまとめる。用例を書籍化された古典本文や電子化された古典本文から収集し、それらを分類・整理することで、それぞれの語がどのように使用されはじめ（漢語の場合は日本へ受容され）、どのようにして意味変化してきたかを考察する。また、時間的意味・程度的意味・評価的意味のそれぞれについて、意味変化の具体的過程を考察し、副詞の意味変化の方向性を類型化する。観点としては、変化する意味とその周辺の意味とのかかわり、および、漢語受容史の中での位置づけに注目する。

### 4. 研究成果

(1) 程度的意味・評価的意味を発生させた漢語副詞の事例として、「けっこう(結構)」の語史をまとめ、口頭発表(学会発表2)をおこなったうえで、論文(雑誌論文3)を発表した。

「けっこう」の副詞用法の展開を以下のようにまとめた。

- ・「けっこう」の副詞用法は、近世後期までに「事態の成立」を評価的に表す用法として発生した。
- ・その頃から、現代に通ずる そうは思わないかもしれないが こう見えて といった「予想外・意外性」の含意の淵源がみとめられる。
- ・述部に量程度性をもつものをとるばあいに、量程度副詞として展開していく素地が形成された。
- ・述部にとるものが動作動詞や存在を表す動詞など、多様になるとともに、「傾向・性質」の含意を新たに発生させる。
- ・形容詞を修飾して抽象的な意味での程度の高さを表すものも増えるようになり、そのようなものは完全に「事態の成立」からは離れたとみてよい。
- ・量程度性を内包する述語を、未確定の事態や将来のこととして述べるばあいに量程度が可能性の高さを含意することもある。過去に生じた確定済みの事態については、述語の量程度性(を推測するという状況)をみとめにくいため、そのようなばあいには文末に係る解釈が成り立ちやすい。
- ・間投詞用法については、「傾向・性質」の含意を有するものに、意味的共通性の見られる用法がある。さらに、後続する発話内容に対する前置きとして機能するようにもなる。

(2) 「代用字表記語」(「当用漢字表」にない字を使う漢字語の書き換えにより、新たに生じた漢字語)に関する共同研究をもとにしたブース発表(学会発表1、共同発表)を日本語学会でおこない、それをもとに、他の事例を研究した論文(雑誌論文1・2)を発表した。

(3) 語史研究をふまえた古文解釈の事例として「方丈記」冒頭文をとりあげ、論文(雑誌論文4)を発表した。

(4) 日本語史叙述についての方法論的な議論の一環として、理論的総合を視野に入れた個別の語史研究のありかたを検討した論文(雑誌論文5)を発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. 鳴海伸一 (2019) 「「蒐集」「収集」の意味分化と「コレクション」「代用字表記語」の受容の一例として」(『国語語彙史の研究』38、65-83 ページ、招待有り)
2. 鳴海伸一 (2019) 「「代用字表記語」としての「保育」「生息」の定着：意味分化意識の発生」(『言語文化研究』(18)、1-16 ページ、査読有り)
3. 鳴海伸一 (2017) 「程度副詞「けっこう」の成立と展開」(『和漢語文研究』15、262(1)-236(27) ページ、査読有り)
4. 鳴海伸一 (2016) 「流れは絶えず 「方丈記」冒頭の文と文章の構造」(『京都府立大学学術報告 人文』68、1-26 ページ、査読無し)
5. 鳴海伸一 (2016) 「語史研究の方法」(大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』ひつじ書房、235-263 ページ)

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 梅林博人・島田泰子・鳴海伸一・新野直哉・橋本行洋 「「代用字表記語」の受容と語義変化 「食餌(事)療法」を例として」(日本語学会 2018 年度春季大会(明治大学)、2018 年 5 月)
2. 鳴海伸一 「程度副詞「結構」の成立と展開」(研究発表会「近現代の新語・新用法および言語規範意識の研究」(国立国語研究所)、2016 年 9 月)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

1. 小野正弘(主幹)・市川孝・見坊豪紀・飯間浩明・中里理子・鳴海伸一・関口祐未編(2019)『三省堂現代新国語辞典 第六版』(三省堂、共編)
2. 鳴海伸一(2018) 書評 田和真紀子著『日本語程度副詞体系の変遷 古代語から近代語へ』『日本語の研究』14(3)、150-157 ページ、依頼有り)
3. 京都府立大学文学部日本・中国文学科 京都府立京都学・歴史館 編(2018)『古典籍へようこそ 遊びをせんとや』京都新聞出版センター

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。